

むかしあつたど

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。子どもがなかったので、さびしく暮らしていました。

あるとき、ふたりは、田んぼの水神さまに、

「どうか、たにしでもかえるでもいいから、子どもをひとりおさずけください」とお願いしました。すると、水神さまがいました。

「この世に星の数ほど子種はあるが、おまえたちにさずける子は、草の根わけてもない。けれども、あまりにかわいそうだから、このたにしをさずけよう。大切に育てよ」

おじいさんとおばあさんは、たにしをひとついただいて、よろこんで家に帰りました。そして、ひさげに水を張って、その中にたにしを入れて、神棚に上げておきました。

おじいさんとおばあさんは、今日は声を出すか、今日は手が出るか、足が出るかと、神棚のたにしばかり気にしていました。いつまでたっても、たにしはたにしのまま。人間の子どもになる気配がありませんでした。

そのうち、お祭りが近くなったので、おじいさんは、町へ米でも売りに行こうと思いました。馬に俵を乗せて出かけようとすると、どこからか、

「おじいさん、おらも町へ行く。馬に乗せてくれ」と、大きな声がしました。おじいさんは、すがたも見えないのに声が出たので、びっくりして、そこらじゅうを探しました。すると、神棚のひさげの中から、たにしが、ふたを開けたり閉めたりしてさけんできました。おじいさんは、「声を出したのは、おまえか。それなら、乗れ」と、大喜びで、たにしを馬に乗せて出かけた。た。

町の長者さまの屋敷の前まで来ると、「水神さまの申し子のたにしが来た」と、大きわざして、家じゅうの人が出て来ました。その中に、長者さまのふたりの娘がいました。妹娘がいちだんと美しかったので、たにしは、それを見ていいました。

「おじいさん。おら、あの娘を嫁にほしい」

おじいさんは、あきれて、

「なんぼおまえが水神さまの申し子でも、たにしの身ではとてまかなわぬ。あきらめろ」といつてきかせました。けれども、たにしは、どうしてももらって行くと、だだをこねて聞きません。あげくの果てに、

「小さな紙ぶくろに米をひとにぎり入れてください。そしたら、あしたの朝、嫁をもらって帰るから」というのでした。おじいさんは、しかたなく、いわれたとおりにしてやりました。

長者さまは、たにしの子がめずらしいので、

「今夜は泊まっていけ」といいました。おじいさんは、たにしと馬を長者さまにあずけて帰っていききました。

長者さまは、たにしの前におぜんを置いて、うんとごちそうしました。すると、ふしぎなことに、魚でもご飯でも、ひとつも残さないで、いつの間にかぺかりとなくなりました。夜になつて、寝るときになると、たにしは、長者さまにいました。

「だんなさま、だんなさま。おら、この紙ぶくろに米をひとにぎり持っているが、大切なものだから、寝ているうちになくさないように、あずかってください」

「ああ、いいともいいとも。神棚に上げておくから」

「でも、だんなさま。もしもなくなるときは、どうしてくれます」

「ああ、そのときは、おまえの好きなものを何でもやる」

長者さまは、米のふくろを神棚にあげ、たにしはふとんに入って寝ました。

夜中になると、たにしは、こっそり起き上がり、神棚に、のたくたとはい上がって、米のふくろをなんぎしておろしました。それから、妹娘の部屋にしのびこみました。たにしは、米をにたにたとかんで、妹娘のくちびるにいっぱいぬりつけておきました。

あくる朝、たにしは、

「おらの米がなくなつた。だれかに食われてしまった」といつて、大泣きに泣きました。長者さまが来てみると、なるほど、昨日神棚に上げておいた米が、ふくろごとなくなっていました。調べてみると、妹娘の口のあたりに、米のかんだのがくつついていました。

たにしは、

「だんなさま。おらの米がなくなつたから、おらの好きなものをもらつていいですか」といいました。

「ああ、約束だから、何でも好きなものを持つていけ」

「では、娘さんを嫁にもらつていきます」

たにしは、妹娘を馬に乗せて、はいどう、はいどうと、家に帰つていきました。

やがて、春になつて、鎮守さまの祭りの日がやってきました。たにしは、祭りを見物に行こうと、嫁さんの髪にかんざしのようにさしてもらつて、出かけました。ところが、あぜ道を歩いてみると、さすが、かあかあと飛んできて、嫁さんの頭から、たにしをつつき落してしまいました。嫁さんは、

「ああ、えらいことだ。おらのだんなさま、田んぼの中に落ちてしまった」と、おどろいて、田んぼの中をのぞいて探しました。けれども、春のことなので、たんぼにはたにしがいっぱいいて、どれが、だんなさまだかわかりません。嫁さんは、悲しくて悲しくて、おうおうと泣きました。すると、後ろから、

「おまえ、何を泣いてるんだ」と、声がしました。ふり向いてみると、水もしたたるようなりつばな若者が、しゃんと立つていました。

「おどろくことはない。おらは、おまえの亭主のたにしだ。おまえのおかげで、人間になることができた。さっきのからすは、水神さまのお使いだ」

嫁さんと若者は、大喜びで家に帰つていきました。

長者さまは、めでたいことだと、ふたりのために結婚式のやり直しをしました。それからというものの、若者の家では、お金がさんぐこんぐとたまって、所切つての長者になつて、たにしの長者さまといわれるようになったということです。

どんどはれえ